

第4章

子どもと戦争

昭和16(1941)年の「国民学校令」は
戦争をすすめる国家に従う「皇国民」をつくろうとするもの
防空頭巾、日の丸弁当、学徒動員、学校での農作業に見知らぬ土地での疎開生活
現代では考えられない過酷な戦時下で
当時の子ども達はそれでもたくましく生き抜いてきた



行李(こうり)

柳や竹で編まれた衣類等を納める入れ物で、戦時中は疎開先への荷物運搬にも使われた
現代の段ボール箱、トランクケースのようなもの
(杉並区立郷土博物館蔵)



陰膳で待った父の帰還

松原 俊夫さん

昭和12(1937)年4月14日、杉並区沓掛町(現・清水)の農家の長男として生まれる。

昭和20(1945)年4月、桃井第一国民学校(現・桃井第一小学校)の2年生時、宮城県湧谷町に集団疎開。

終戦後、杉並に帰る。成人後は電気メーカー、食品メーカーに勤務し、転勤で秋田、岩手、栃木などで暮らす。50歳の時、父親が亡くなったことを機に農家を継ぎ、現在に至る。

■ ある秋の日の出来事

昭和19(1944)年、夏のある日、小学一年の私は、悪童どもと真っ青な北のはるか上空を見上げていた。キラキラと銀色に輝く飛行機が、長い飛行機雲をひいて西から東へ飛んでいった。そして秋迄なに事もなく過ぎていった。

その日、警報解除になったので、私は防空壕(参照▶P20)を出て、農作業場で子ども用自転車に乗っていた。警報が鳴らないのに、その時、突然西の方から物凄い爆音が聞こえたが、高い杉木立に阻まれて、機影を見ることは出来なかった。そしてシュツシュツシュツという音がしだした。咄嗟(とっさ)に爆弾だと気づき、自転車を放りだして40メートル位離れた壕を目ざして必死に走った。その間、落下音はシュシュシュからゴォーとなり、ガガガッとかわった。壕にとび込むと同時に物凄い音がして、大きくゆれ動いたが、竹林の中に在った為か、崩れる事はなく、泥だらけになるだけですんだ。

この時、近くに250キログラム爆弾が3発同時に落ち、近いのは壕から20メートルと離れていない道路に、8メートル位の大穴をあけた。尚、この大穴は終戦後も長い間放置されたままであった。もしその後多用されたという1トン爆弾であったら、どうであったであろう。この日は11月24日であり、第1回目の東京空襲の日であった。この様に爆撃を受けたのは、近くに中島飛行機工場や高射機関砲・高射砲(参照▶P20)の陣地があったためではないかと思われる。

■ 家族それぞれの思い

この後、祖父は敷地の反対側に、病身をおして2人用の小さな壕を掘った。警報が鳴ると、大きい方には江戸時代生まれの曾祖父母、祖母、母、妹等が入り、小さな方には祖父と私が入った。幼い私は、なぜ家族が別々にいなければいけないのか理解出来なかったし、警報中、祖父と二人でジットしているのは苦痛でもあった。祖父はその間キセル煙草をすっていたが。

しかしながら、私の父を含めた三人の息子を外地に出征さ

せていた明治中期生まれの祖父母にすると、いつの日か息子達が帰ってきた時、家族がいなくては戸惑うだろうとの配慮から分散させたのであろう。

父は昭和16(1941)年初夏、召集をうけ、一度の面会もなく部隊は旧北満東安省に送られ、5年半後に帰国した。その間、母は毎日朝夕「陰膳(かげぜん)」(参照▶P16)を供えていた。我が家は各自「膳」で食事をし、家長である祖父を中心に席が決まっていた。不在の父の席にも膳を供し、戦地での無事を祈った。



戦時中に撮影した家族写真。前列左から4番目が松原さん。後列左から4番目が祖父

■ B29爆撃機が墜ちた

防空壕の出入り口から、西の空が良く見えた。その日(昭和20年4月7日)午後、どこかの爆撃を終えたのであろう編隊が、北から南へ帰途についていた。「一機が煙を吐いて墜ちていく」と言っ、母と叔母が手を叩いていた。壕を出ると、南の空にもすぞい黒煙が、まっすぐ上がっていた。友人の政雄ちゃん(故・松原政雄氏)が来て、「B29(参照▶P20)が墜ちた。四面道のあたりだから行こう」と二人で出かけた。煙は遠かった。荻窪八幡宮東側の道を行き、中央線、五日市街道を越え、水道道路まで来て、煙はまだ先であった。畑や農道を走って、やっと着いた。その場所は、恐らく久我山の線路の北あたりと思われる。夕暮れの畑に機体が突き刺さるようになり、垂直尾翼が中

空に突き出て、近くの杉の木より高く見えた。その大きさに驚愕した。多くの人が、遠巻きにして見守っていた。しばらくして、兵隊が菰をかぶせた担架を担いで目の前を通ったが、担架に土を投げかける人もいた。搭乗員だったのかもしれない。すっかり暗くなってしまったので帰ることにしたが、一里近くも歩いて来たので、咽が渴いていた。政雄ちゃんと相談し、五日市街道沿いの母の実家で、水を飲ませてもらう事にした。たどり着くと叔母さんが「俊ちゃんが来たよ」と言い、祖父母も出てきた。特段叱られることもなく「よく来られたな。暗いから気を付けて帰れよ」と言って、乾パンを一袋くれた。二人でそれをかじりながら、灯火管制(参照▶P20)で真っ暗な道をどうにか帰ってきた。無断で遅くなってしまったので、叱られると思い、台所口から入ろうとしたら、母が仁王立ちで立っており、薪で飛び上がるほど尻を叩かれた。警報解除の後、私がいなくなってしまう、夜になっても帰ってこないの、皆が心配していたらしい。自分が悪いのであるから叩かれてもしょうがないと思うと同時に、政雄ちゃんも叱られているだろうと思った。

■ 宮城への学童疎開

警報が度々鳴るようになると、低学年生も疎開していく事となり、その準備の為、登校した。学童疎開(参照▶P18)は、子どもを安全な所に避難させると同時に、将来「本土決戦」の時、足手まといにならない様、引き離しておく事も目的としたとも聞く。学校で訓練した事のひとつは「ボタン付け」と「カギざきの直し」。もうひとつは列車からの退避訓練。校庭に石灰で客車の平面図が描かれ、座席にみためスペースに椅子が3脚対でおかれていた。6名が対面して座ると、先生が笛を吹く。皆一斉に出口から走り出て、客車から離れ両手で目、耳をふさぎ「伏せ」をした。

家では母、祖母が手作りで疎開荷物を送る準備をしていた。荷物は、布団袋、柳行李(やなぎごうり)(参照▶P18)各ひとつずつと定められていた。

昭和20(1945)年4月初旬の夕刻、学童は荻窪駅北口(現・

タウンセブン広場)の野原に大きなリュックを背負い、水筒、防空頭巾、肩掛けバッグを両肩にかけて集合した。見送りはホーム迄で、私の母も、妹を背負い、他の母親にまじり手を振っていた。不思議と涙を流している者はなく、私もその時は遠足気分であった。

目的地は宮城県の湧谷町。翌夕刻、東北本線より支線に乗換え、その町に着いたのは夜であった。24時間を要した。遠足気分は一転、急に心細くなった。大きな旅館で宿舎の振り分けが行われ、兄弟姉妹は同じ宿舎になった。一人の私は小さな料理屋になった。中年の男先生、師範を出たの女先生、地元の寮母3人、そして学童は30名位か。

一日は、早朝の起床・洗面そして前庭に整列し「宮城遥拝(きゅうじょうようはい)」(参照▶P20)「父母へのあいさつ」を最敬礼で行う。その後、体操、乾布まさつを行った。夜は3部屋位を抜いた部屋で、修学旅行の様に縦一文字に寝たが、暗闇でもすぐ着替えが出来る様、ズボンを下に、着る順序に畳んで頭の前においた。習性となり、後日帰宅後もこれをやっていたが、祖母がそれを見て泣いていた。夜中になると、所々で小さく咽(むせ)び泣きの声が聞こえた。幼な子が親から急に引き離されたのだ。時がたつにつれ、食料不足による空腹と、それに我慢できず、青穂や野草を食べた為、下痢になり、体力が奪われ、みるみる痩せていった。又、不衛生の為か疥癬(かいせん)と虱(しらみ)が蔓延した。痒いので手で頭をかくと、爪の間に虱がたくさん挟まってきた。そして衣服の縫目には虱のたまごが並んでいた。この様なもものでは、元気に遊んだり、勉強するどころではなく、終日、室内廊下でゴロゴロし、虱取りなどをしていた。皆そろって外出したのは3~4回位だったと思う。

8月15日。暑い晴天の日であった。前庭に白布をかけたテーブルにラジオが置かれ、子供は身なりを整え整列し、姿勢を正して「玉音放送」(参照▶P20)を聞いた。ザアザアという雑音だけが聞こえた。しかし、例え明瞭に放送が聞こえたとしても幼い私達にはその意味することは理解出来なかったであろう。



玉音放送を信じられなかった軍国少年

田村 直幸さん

昭和6(1931)年に北区に生まれ、5歳の頃に井草に移る。

3人兄弟の末っ子、父は建築家。長兄の出征や、親戚が空襲被害を受けるなか、中学2年生で終戦を迎える。終戦後は応用物理学の道へ進み、高分子の放射線照射研究などに従事。研究所のあった群馬県高崎に居住。海外赴任から帰国し、退職後に平成15(2003)年、36年ぶりに杉並に戻る。

■ 米英との戦争

生まれた年の昭和6(1931)年に満州事変が、昭和12(1937)年に支那事変が、そして昭和16(1941)年12月8日、大東亜戦争が始まる。桃井第五国民学校(現・桃井第五小学校)4年生のときだった。当然軍国主義の申し子として育ち、軍人になって戦い、死ぬことしか考えない少年になっていた。



都立石神井中学校

り出され、それに度重なる空襲で学校の授業は壊滅状態だった。クラスの友人は縁故を頼って次々と疎開していき、1学年250人いた生徒が150人まで減ってしまった。それでも、わが神国は必ず勝つと信じていた。



家の前の畑にて



中学生の頃の田村さん

緒戦の日本軍の華々しい戦果で、日本軍は東南アジアを席卷した。南方のゴムで作ったゴムまりをクラス全員がもらって、皆有頂天になった。昭和18(1943)年に入ってから戦況は次第に不利となり、日本軍は後退を続ける。

■ 激しくなる爆撃

昭和19(1944)年、都立石神井中学校に入学した。その年の11月24日、東京西郊はB29(参照▶P20)の大編隊に初めての爆撃を受ける。学校の近くの飛行機工場が爆撃の対象だ。昭和20(1945)年に入ってから爆撃は次第に激しくなり、夜間に防空壕(参照▶P20)に入る日が多くなる。高射砲(参照▶P20)陣地が近く(現在の中瀬中付近)にできてから、爆弾が付近に落ちることも珍しくなく、爆風で家の障子が滅茶苦茶になったことがある。

中学2年になると、上級生は勤労動員で工場へ行き、学校は2年と1年だけになった。しかし、2年生も、爆弾の穴埋め、焼跡の整理、飛行機工場の残骸の片付けなどに毎日のように駆

■ 消えた山羊牧場

西武新宿線井荻一上井草駅間の北側は、当時は田園で小川が流れていた。その北側の斜面に山羊の牧場があり、ここで山羊乳の配達をしてくれていた。貴重な栄養源だった。桃五時代の旧友、唐木君の家が経営していた。

ある晩、空襲警報(参照▶P20)が鳴り、家の防空壕に駆け込んだ。「ヒュル、ヒュル、ヒュル……」、甲高い音を立てて落下してくる爆弾の音が防空壕の中で聞こえると、目と耳を防護する姿勢をとる。この時ばかりは「ほかに落ちてくれ」と祈る。防空壕の扉の激しい振動音が聞こえた。近くに爆弾が落ちたらしい。

翌日になって噂が飛んできた。山羊牧場を1トン爆弾が直撃し、唐木君一家が全滅したという。爆弾によって大きな穴があき、牧場も家も跡形もなくなっていた。茫然となった。その日から山羊乳の配達りは止まった。現在、山羊牧場と思われる周辺は住宅街と化し、小川は暗渠となり、田園の雰囲気は全くない。

■ 8月15日、軍国少年の呪縛

「明日正午に、重大放送があります」というニュースがラジオから流れた。昭和20(1945)年8月14日のことだった。本土決戦を間近に控えて、天皇陛下から、戦争遂行のため国民に奮起を望むお言葉があるものと信じた。

8月15日が来た。家のラジオの調子が悪く、両親と一緒に近所の家でラジオを聞かせてもらう。他の家の人たちの顔も見える。「只今より重大な放送があります。皆さま、ご起立願います」。君が代が流れ、陛下のお声が流れてきた。ラジオの雑音が激しいのと、降伏などありえないという思い込みもあって、私は詔勅(参照▶P20)の内容を理解できなかった。

玉音放送(参照▶P20)が終わる頃、周りの大人たちが皆、泣き始めたのに気がついた。軍国少年である私は頭の中が混乱していた。平和主義の父は「これでよかったんですよ」と周りに言っている。

登校日になった。クラスでは玉音放送で持ちきりだった。降伏したのは作戦だという意見が圧倒的だ。校庭で校長から訓示があった。「戦争はこれで負けたのではない。隠忍自重(いんにんじちょう)、復讐のときを待て」というのが趣旨だった。

9月に入って、大勢の米兵がジープを連ねて学校に乗り込んできた。軍事教練(参照▶P20)で使う銃剣類を接收するためである。校長が米兵にペコペコ頭を下げている情けない姿を見た時、不思議に軍国少年の呪縛が解けていった。

■ 外国文化への関心

軍国少年の呪縛が解けるとともに、外国文化を知りたいという欲望が高まってきた。終戦後しばらく経って、兵役にしていた英語教諭の柴崎先生が復員され、再びわれわれの担任に戻った。外国文化の開放もあって、英語の授業への期待も高まった。

この中学2年生の2学期からの1年間は、私の中学生生活にとって最も充実した時期だった。英語、そして外国文化に対



児童用椅子
東京都が疎開児童用に送った机、椅子の中の一つ
(杉並区立郷土博物館蔵)

する強い関心は、この時期に醸成されたものと思う。先生から勧められてイギリス文学にも親しむようになった。先生からは、読書や人生論までその影響を受けた。

その後、放射線照射研究の世界に進み、イギリス留学や海外赴任をして、英語が近くにある生活を過ごした。退職後に、柴崎先生が後年学長を務めた大学を訪れ、その当時のお写真を頂いた。写真の脇に自筆で書かれた「Challenge」という座右の銘に、若いときの先生との思い出がよみがえった。



インタビュー

堀之内国民学校を離れ、群馬県に縁故疎開

蜂巢 成昭さん

昭和12(1937)年、松ノ木生まれ。昭和19(1944)年、堀之内国民学校(現・堀之内小学校)に入学。

同年8月から昭和20(1945)年8月まで、群馬県渋川市にある父の実家に縁故疎開する。

平成14(2002)年、戦争経験を語り継ぐボランティア活動を開始。区内の小中学校で講演を続けている。

■ 友達と離れ、ひとり縁故疎開

私は、日中戦争が勃発した年に生まれ、幼少期を松ノ木で過ごした。空襲警報(参照▶P20)が絶えない戦時中ではあったが、近所には仲の良い幼なじみがたくさんいて、一緒に小学校に通う日を楽しみにしていた。しかし、昭和19(1944)年4月に堀之内国民学校(現・堀之内小学校)に入学すると同時に、校長先生から「田舎に親類のある生徒は縁故疎開(参照▶P18)するように」と訓話があり、その年の8月、父の実家がある群馬県豊秋村(現・渋川市)に疎開することになった。当時、1年生で縁故疎開する生徒は少なく、幼心にも、自分一人だけ親しい

友達と離れるのは辛かった。

豊秋村には、祖母と叔父一家が住んでいた。涙ながらに母と別れた後、布団を背負った父に手を引かれて疎開先に向かい、地元の豊秋国民学校に転入した。日焼けした地元の子どもたちの中で、杉並育ちの青白い都会っ子は珍しがられ、群馬弁の「～だんべのう」「～ずら」という方言が使えなかった私は、いじめの対象になってしまった。悲しかったが「東京の空襲に比べれば、ずっとましだ」と思い、じっと耐えたのを覚えている。



疎開先で通った豊秋国民学校の通知簿

親戚の家とは言え、小学校に上がったばかりの小さな子どもが母と離れて暮らす生活は、とても寂しかった。そんな私を、祖母が「メソメソするな」と慰めてくれ、夜は一緒に寝てくれた。祖母は私が中学3年生の時に亡くなったのだが、埋葬の際、戦争中に母代わりとなってかわいがってくれた思い出がよみがえり、別れが辛くて棺桶に土をかけられなかったことを思い出す(註1)。

■ 心の支えは母から届くハガキ

寂しい疎開生活で何よりもうれしかったのは、東京から毎月1回届く母からのハガキだった。小学1年だった私には、まだ返事が書けなかったが、そのハガキをお守りだと思って、いつも身に付けていた。現在、私の手元に、母が取っておいた戦時中のハガキや切手が保管されている。昭和19(1944)年のハガキを見ると、現在の3分の2程度の大きさしかなく、当時の物資不足がしのばれる。また、戦争中の切手は「神風特攻隊」や「戦艦」など戦意を高揚するような図案だったが、戦後は数字だけの図案に変わっている。切手には糊もミシン目もなく、一枚ずつハサミで切って使っていた。

食料事情がひっ迫してくると、豊秋村には、高崎市などの都会からたくさんの方が買い出しにやって来た。叔父の家は農家だったこともあり、戦時中でも家族が食べていけるくらいの食料はあったが、それでも潤沢にはなかった。買い出しに来た人に対して、「おやげないねえ…」(註2)と祖母が涙ながらに断っていたのを覚えている。

■ 堀之内小学校は焼けてしまった



堀之内国民学校時代の蜂巢さん(右)

戦争が終わって帰京するときは、群馬まで母が迎えに来てくれた。終戦直後の混乱期で交通事情が悪く、貨物列車に揺られる旅だったが、私は「これで、また父母と一緒に暮らせる」という喜びでいっぱいだった。しかし、久しぶりに見た東京は疎開前とは一変し、上野駅には浮浪者があふれ、麻布で質屋を営んでいた裕福な親戚も空襲被害で見る

影もなく焼け出されていた。母校の堀之内国民学校は空襲（参照▶P18）で全焼して、建物の土台だけがかりうじて残っている状態だった。そのため、校舎が再建されるまでの間は杉並第二小学校の校舎を借りて、午後だけ授業を受ける日が続いた。昭和25（1950）年、私が5年生のときに、ようやく校舎が完成したが、机もイスもなく、大宮小学校から要らない机を運んで来たり、戦争の名残で校庭に散らばっていたガレキを体操の時間に片付けたりと、授業の再開までは、かなり時間がかかった。

育ちざかりの私たちを苦しめたのは、何と言っても空腹だった。戦中戦後を通して、粗末なものばかり食べていた。米に麦が半分混じったご飯は夕方になると臭くなるが、それを塩むすびにしたものを、空腹しのぎに食べたりした。昭和23（1948）年に生まれた妹の母子手帳を見ると、母子の栄養不足を解消するため、バター、牛肉などの切符交換券がついている。

■ 子どもたちに戦争経験を語り継ぐ

私の母は、戦争で2人の弟を亡くしている。上の叔父は26歳で、下の叔父は22歳の若さで、それぞれ海軍の潜水艦に乗務中、洋上で戦死した。海で亡くなったため遺骨もなく、戦後しばらく経ってから名前が書かれた白木の箱が届いただけだった。空っぽの骨壺を四谷の墓所に納めたときの母の辛さを思うと、今でも胸が苦しくなる。私も、自分を膝に乗せて遊んでくれた叔父たちが忘れられず、形見の帽子を何年も大切にしていたことを思い出す。

定年退職後、私は、区内の小中学生に戦争体験を話すボランティア活動をするようになった。子どもたちに話をするとき、いつも私の心には、若くして戦死した2人の叔父の無念を伝えたいという思いがある。また縁故疎開の経験や、ものの無かった時代の様子を今の子どもたちに説明するため、疎開先の通信簿、母が遺した妹の母子手帳や戦時中の家計簿など、

当時の資料を大切に保管している。これからも、自分が経験した事実をありのままに子どもたちに伝え、戦争を語り継いでいきたい。



戦時中に使われていた切手

註1 当時の群馬県では、土葬が行われていた。

註2 群馬県の方言で、「気の毒だねえ」の意味。

（平成27年10月 取材：内藤じゅん）



防空頭巾と過ごした別所温泉での集団疎開

北川 恵津子さん

昭和10(1935)年7月6日生まれ。若杉国民学校(現・天沼小学校)時代に学童集団疎開を経験する。結婚後もずっと杉並に暮らし、40年余り続けている書道は、北川清光の名前で書家として活動中。また、ボランティアで書道や、幼い頃より身近にあった植物を栽培し、80歳になった現在も継続している。

戦後70年の年を迎えると同時に、私自身80歳になります。当時、9歳と何か月という若い年齢で、今と違って、ラジオしかなかった時代、何の情報もないまま、戦争という大きな渦に巻き込まれて行った時代、国策として先ず次世代に、子どもを残す為、縁故疎開と集団疎開(参照▶P18)組と分けられたのです。

私は、杉並の農家に生まれました。四人きょうだいの2番目で、姉、妹、弟がいました。その頃の家族との生活を思うと、姉は学業に人一倍熱心で後に女医になり、妹は体が弱かったので、私がよく父の農作業を手伝っていたことを思い出します。作った野菜を、井草八幡宮の隣にあった青物市場に運ぶようなことも手伝っていました。

父は杉並の人でしたし、母も練馬の生まれでしたので、当然田舎がなく、集団疎開組でした。集団疎開の対象は小学校3年生以上でしたので、高女だった姉、5歳だった妹、2歳の弟は対象外で、私だけが対象になってしまったというのも、国策とはいえ親はどんな思いであったか、今現在自分が親になって思う時、さぞ辛く切なかっただろうと思います。

母は今年104歳と6か月で亡くなりましたが、集団疎開で一人別になってしまうその思いを、親として精一杯の愛情を心こめて、ひと一倍大きな防空頭巾(参照▶P17)を作ってくれ、現在も大切に私の生涯の宝物となっています。防空頭巾を縫った布は、妙正寺の幕をほどいた布を母が染め直して作ったと聞いています。また、お手玉を持たせてくれたのですが、その中身に豆や飴玉を入れてくれていたこともよく覚えています。

私の記憶では、昭和19(1944)年、若杉国民学校、西田国民学校と立教女学院の3年生から6年生で、何も知らぬまま、まるで遠足にでも行く様に、夕方校庭に集まった時のことが走馬燈のように思い出されます。見送りにはもちろん母が来てくれていましたが、あまりに大勢だったので、その場で母を見つけ



大人が被っても十分な大きさがある防空頭巾。名札は父が墨で書いてくれた

ることはできませんでした。何より、遠足気分で浮かれていました。子どものほかに、小さな子ども達を預かる先生方、疎開先でお手伝い出来る親達又姉達を乗せ、荻窪駅から出発し、集団疎開専用列車で、一路長野へ向かいました。その時に引率された先生の中に、田村宗代先生がおられました。

列車の中では、恐らくよく眠ったんでしょう、朝、目が覚めると車窓の景色が一面山々に囲まれ、今迄見た事もない景色で、何というところに来てしまったんだろうと思いました。現在の長野県上田市別所温泉という所に着き、近くに住んでいる同じ位の子ども達が日ノ丸の小旗を振って迎えてくれたのが、親から遠く離れた寂しさよりも、うれしかった思い出でした。

疎開先は、現在の花屋ホテルでしたが、いくつかある疎開先の中で一番立派であったため、疎開先が公平ではないということで、何か所かの疎開先を回りました。

同じ位の子ども達に歓迎してもらったうれしさも束の間で、疎開先の生活は大変でした。毎朝、北向観音様の境内でラジオ体操をして、東京の方角を向いて「お父さん、お母さん、おはようございます」と挨拶し一日が始まりました。大勢の子ども達の食料や燃料の調達のために、子ども達全員が山に薪を拾い

に行きました。山で漆にかぶれてしまって、顔がパンパンに腫れてしまったこともあり。今の時代と違って絶対服従でいやな仕事は下級生に、といった具合で、反発も出来ず無言で誰も助けてくれる人もなく小さく震えていました。そんな私を心配して、父は疎開している間に5回も私を訪ねてくれました。

そんな疎開生活でしたが、私は終戦を待たずに、家族の元に帰りました。昭和20(1945)年の6月、父が、住居の母屋を取り壊して資材をこしらえ、青梅の御嶽の先の川井というところに、家族で疎開するための家を立て、私を疎開先に迎えに来ました。川井の家は、6畳しかない狭い住まいでしたが、家族5人と叔母、いとこの7名で暮らし、1か月と少しで終戦を迎えたのです。

今では第二のふる里となった別所温泉には、毎年息子が連れて行ってきており、その折には、花屋ホテルに宿泊しています。今年は特に母を亡くした後だけに感無量で、昔いた北向観音の境内が、こんなにも狭い所だったのかと、如何に



母が心をこめて作ってくれた。妙正寺の幕をほどいて、染め直して作られたと聞いている

自分が小さかったかと思いました。木だけが昔と違って大きく大きく育っていました。

仲間と「数年に一度は」と同窓会を開いておりましたが、疎開に引率された田村先生も現在98歳に、又もうお一人の功刀(くぬぎ)先生も99歳を超えられ、それぞれが老いてしまい、老老介護となった現在はその会も自然消滅し、尚音信不通となった人もあり、大変寂しいことでもあります。残り少なくなった人生を今はボランティア活動に参加し、日々健康でいられる様祈って感謝し、二度とあの様な悲惨な戦争が起きません様願っております。



集団疎開に引率された恩師田村宗代先生が平成27(2015)年に出された歌集『愛』の中にも、疎開の思い出が綴られている